

田島ヶ原のノウルシ

さいたま市文化財調査専門員 碓田 洋二



4月中旬、サクラソウの花が咲き揃った田島ヶ原は大勢の人々にぎわいます。そうした時、「サクラソウはどこにあるの。」と、お目当てのサクラソウを探して右往左往する人をよく見かけます。聞けば、一面にサクラソウの花で覆われていると思っていたのだとか。また、ノウルシで黄色く染まった田島ヶ原を、「まるで菜の花畑みたいだ。」という人も多い。そして、「いっぱいある黄色いのがサクラソウかい。」とたずねるので、ノウルシですと答え、「サクラソウがかわいそうだから、ノウルシを抜いてしまえ。」とおっしゃる。

大正5年(1916年)4月に田島ヶ原を調査された史蹟名勝天然記念物調査会委員の三好學博士が、「春の頃、原一面がサクラソウの紅花に混じって黄色のノウルシ、紫色と白のスマレ、紫色のチョウジソウ、紅紫色のムラサキケマン・ヤブエンゴサク、黄金色のヒキノカサなどの花が咲き、天然の花園のように大変に美しい眺めになる。」と述べているように、その昔から、田島ヶ原ではサクラソウの紅色とノウルシの黄色が織りなす景観が見られたのです。

今から50年ほど前の事です。第二次世界大戦に敗れた国内では食糧が不足して、人々は道の片側半分・公園・校庭などを畑にして、不足する食糧を補いました。この時、田島ヶ原も約70%の土地が畑になったのです。昭和37年(1962年)に田島ヶ原が市の財産になって畑はなくなり、ここから今の田島ヶ原の姿に復活したのです。

復活のようすを振り返ると、ノウルシが少なかった時には、増えろ増えろと声援したものです。やがて、ノウルシとサクラソウの群落が広がって、花の時期には黄色と紅色の縞模様で花園のように美しく見えました。その後もノウルシの群落は増え続けて、サクラソウの群落を覆い隠すほどになり、ノウルシの黄色ばかりが目立ってサクラソウの紅色が少ない現在の姿になったのです。



▲一面ノウルシ群落になった田島ヶ原

ノウルシが田島ヶ原を覆い尽くすほど増えたのは、次の3つの理由によります。第1は、湿生植物のノウルシにとって、田島ヶ原は低湿地なので生育に適していること。第2は、春植物のサクラソウを保護するための管理が、同じ春植物のノウルシの生育を助けていること。第3に、ノウルシは地下茎と種子によって盛んに繁殖し、ほとんど天敵がないことです。

このように繁殖が著しいと、他の植物、特にサクラソウに影響が出るのではないかと心配です。サクラソウとノウルシの生育のようすを比べると、出芽してから地上部が枯れるまでの過ごし方は、両方とも春植物なのでよく似ています。似ている植物が出会うと場所取り合戦が始まるのです。植物は動物のように食いついたり取っ組みしたりはしませんが、いろいろな方法を使って戦います。サクラソウとノウルシは、草丈を伸ばし葉っぱを広げて太陽の光を奪い合う方法で戦います。この戦いでは草丈の高いノウルシが草丈の低いサクラソウの上にかぶさって、光を独り占めしてサクラソウに勝ちます。(図1)

地中では地下茎や根っこで相手を押り返す方法で戦います。この戦いでは地中に数年間は残る太くて長い地下茎をつくるノウルシが、毎年細くて短い地下茎をつくるサクラソウを押し戻してサクラソウに勝ちます。(図2)

このように、地上と地下の戦いでサクラソウに勝ってしまうノウルシを取り除けば、サクラソウを救えるのでしょうか。ノウルシを取り除くと、その跡に帰化植物のセイタカアワダチソウなどが生えてきて、田島ヶ原の植生が変化してしまうのです。現在は、植生の変化を起こさずに、ノウルシの繁殖を抑える方法を探しています。

なお、田島ヶ原では増え過ぎが問題のノウルシも、埼玉県や国では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少植物なのです。

図1 地上の戦い

ノウルシとサクラソウは陽光を奪い合って戦います

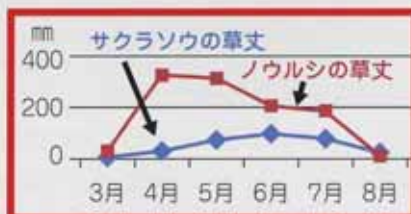
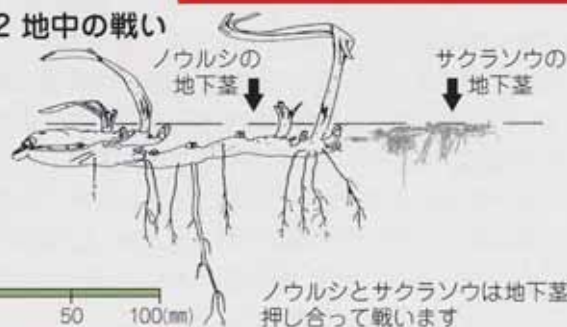


図2 地中の戦い



『レッドデータブック』のサクラソウの絶滅危惧度が低下 —田島ケ原の株数は減少—

『レッドデータブック』とは、絶滅の恐れのある野生生物について記載したデータブックのことで、昭和41年に国際自然保護連合が中心となって作成されたのが初めて、現在では各国や団体等が多く編集しています。

さて、この『レッドデータブック』では絶滅危惧度の高い順に、「絶滅 (EX)」「野生絶滅 (EW)」「絶滅危惧 I A (CR)」「絶滅危惧 I B (EN)」「絶滅危惧 II (VU)」「準絶滅危惧 (NT)」「情報不足 (DD)」というカテゴリーがあります。サクラソウは、平成19年8月のリスト改定に伴い、保全のための努力が払われた結果、絶滅の危険性が下がったとして、それまでの「絶滅危惧 II」から「準絶滅危惧」に分類されるようになりました。

これは、日本全国のサクラソウの危惧度ということになります。それでは、田島ケ原のサクラソウはどうなっているのでしょうか。

田島ケ原では、毎年開花期に生育株数と開花株数の調査をしています。第1次と第2次指定地の中に、10m×10mの永久調査枠を11ヶ所設置し、昭和40年からその調査を実施しています。その推移はというと、昭和45年頃から平成に入るまでは調査開始時の数値を下回る状態が続いていましたが、その後増加に転じ、平成20年春の調査では、昭和40年を100とした場合に、生育株数で164.2、開花株数で260.1という結果が出ています。つまり、調査開始時に比して、大きく増加していること



▲調査枠をさらに細分した、1m×1mのメッシュの様子

になります。しかしながら、前年の調査と比べると、生育株数で8.07、開花株数で0.43のそれぞれ減となり、必ずしも右肩上がりというわけにはいきません。むしろ近年は、右肩下がりの傾向にあります。

田島ケ原では、昨年度からオギ・ヨシの草焼きを再開しています。これは、一つにはオギ・ヨシの持つ栄養分を自生地に戻してあげるという目的があります。

今年度の草焼きは1月21日に実施しましたが、その翌日には燃えた灰が強風で飛ばされることなく、地面で雨に打たれました。つまり、焼却灰の持つ栄養分が自生地に帰っていったといえるのです。



▲平成20年度の草焼きの様子

それでは、この焼却灰の中にはどれだけの栄養分が含まれているのでしょうか。そこで、草焼きの前に、オギ・ヨシ、つる性植物を2m×2mの区域で刈り取り、それを燃やして「灰」を作成、その分析を現在依頼しているところです。

田島ケ原のいきもの(No.2)

—ハンノキ—

まだ、雪のちらつくこともある2月中旬の田島ケ原は広々としていて、むき出しになった地面には草焼きで炭になったヨシやオギの残骸が突っ立っているばかりです。その頃、ハンノキは花盛りで、枝先には黄褐色の花穂がいっぱいぶら下がっています。ぶら下がっているのは雄花だけがたくさん集まった花穂で、この雄の花穂の後ろ側に立っている小さいのが雌の花穂です。この寒い時期には花粉を運んでくれる昆虫がいないので、花には昆虫を誘う蜜や香がないばかりか、花びらもありません。花粉はスギやイチョウのように風によって運ばれ、風が吹くと花粉は黄色い煙のように舞い上がります。

(さいたま市文化財調査専門員 磯田 洋二)



さくらそう通信 24号 平成21年3月31日

編集・発行 さいたま市教育委員会

さいたま市浦和区常盤6-4-4

☎048-829-1723 (文化財保護課)

「さくらそう通信」のバックナンバーはさいたま市のホームページでご覧いただけます。